新しい芸術を求めて

有島生馬

時は明治の頃、鎌倉の※鶴岡八幡宮での出来事です。

「あれっ、あんな所で何をしているのだろう。」

学校帰りの子どもたちが、源平池のそばにいる、若い西洋人の姿をみつけました。子どもたちが近づいてみると、その西洋人は、※イーゼルに大きなキャンバスを立てかけて、油絵の具で池を写生しているところでした。

当時の日本では、まだ油絵は珍しかったこともあり、子どもたちは、しばらくその様子をながめていました。やがて、一人去り二

【有島生馬】

（川内まごころ文学館蔵）

【鶴岡八幡宮】
神奈川県鎌倉市にある神社。

【イーゼル】
絵を描くときに、画板やキャンバスをのせる台。

人去りして帰って行きましたが、最後に一人残った男の子だけは、なぜかその場をいつまでも立ち去ることができずに、じっと写生の様子を見つめていました。若い西洋人は、池に浮かぶ大きな蓮の葉の上に、透明な露の玉が光るのを描いているところでした。緑の葉に、空色の明るい絵の具をつけ加えると、たちまち「パッ」と、画面が生き生きとなりました。

「すごい。実際には無い色をつける、まるで魔法のようだ。」

それは男の子にとって、大きな驚きと興奮でした。

これが、のちに日本の近代美術の先駆けとして活躍する、有島生馬が西洋画と出会った瞬間でした。

【関連年表】

一八八二年　誕生

一九〇〇年
肋膜炎にかかり、翌年、平佐村で療養。

一九〇一年七月
東京外国語学校へ入学。

一九〇五年
イタリアへ留学。

一九〇七年
パリに移り住む。

一九一〇年
帰国し、個展を開く。

一九五六年
鹿児島で回顧展を開催。

一九七四年　死去

有島生馬は、鹿児島県出身の実業家である有島武の二男として、横浜で生まれました。生馬の兄弟は、いずれも芸術や文学に優れた才能を発揮したため、「有島芸術三兄弟」といわれています。生馬の兄は、小説家として「一房の葡萄」などの作品を残した有島武郎。また生馬の弟には、「安城家の兄弟」などの作品を残した里見弴がいます。

ここでは、有島生馬の生涯を振り返りながら、その生き方や考え方を見つめてみましょう。

幼い頃に、鶴岡八幡宮で西洋画と衝撃的な出会いをした生馬は、十八才の時に、※肋膜炎という肺の病気にかかります。そして、空

【肋膜炎】
肺の外部を覆う胸膜に炎症が起こる病気。

気のきれいな地で療養生活を送るため、父のふるさとである平佐村（現在の薩摩川内市）に移り住みました。

のどかな自然に囲まれた中で落ち着いた暮らしをしていた生馬は、ある日、若い※カトリックの神父さんに出会います。神父さんは、イタリアのローマへ留学したことがあり、生馬にイタリアの話をしたり、壮大な教会や壁画のアルバムを見せてくれたりしました。初めて見聞きするイタリアの芸術に、生馬は、興味がわくのをおさえられませんでした。

そうして療養を終えて東京に戻った生馬は、

「イタリアに渡って絵の勉強がしたい。」

とイタリア留学を決意し、東京外国語学校に入学します。また、イ

【カトリック】
キリスト教の最大の教派。

【伝えてみよう】
あなたの知っている、日本や外国の芸術作品を紹介してみよう。

タリア語の勉強に励む一方で、生馬は文学にも興味を持ち、当時の文学界で活躍していた※島崎藤村を訪ね、文学や芸術について熱心に語り合いました。

カミーユ・ピサロ「ポントワーズの農園」鹿児島市立美術館蔵

そして生馬はこのとき、藤村から、※ピサロというフランスの画家の画集を見せられます。生馬は、その絵の生き生きとした迫力に、「ウワッ」と心臓がとまりそうになるぐらい驚きました。

「こんな絵を描いてみたい。」

【島崎藤村】
明治時代を代表する詩人・小説家。「若菜集」「破戒」などの作品がある。

【カミーユ・ピサロ】
十九世紀フランスの画家。田園風景や街の様子などを多く描いた。

ピサロの絵との出会いは人生二度目の衝撃であり、その瞬間に生馬は、画家への道を歩むことを心に決めたのでした。

藤島武二　「鳥羽の日の出」鹿児島市立美術館蔵

その後すぐに生馬は、鹿児島出身の画家、※藤島武二の画塾に入門します。このころの日本の洋画は、自然や人物を写真のように正確に描くことが中心でしたが、藤島はこれにこだわらず、作者の気持ちが伝わるような、伸び伸びとした絵を描いていました。

【藤島武二】

明治時代末期から昭和初期にかけて活躍した画家。日本の近代洋画の基礎を築いた。

そんな藤島の独創的な姿勢に共感し、彼の下で絵画の勉強に打ち込んだ生馬は、一年が過ぎる頃、かねてから望んでいたイタリアへの留学を、ついに決心します。

そうして、一九〇五年（明治三十八年）にイタリアへと渡った生馬でしたが、イタリアの国立美術学校で学ぶ内容に飽き足らず、二年後には、フランスのパリに移り住みました。そこで、三度目の衝撃的な出会いがおこります。

それは、※ポール・セザンヌという画家が描いた絵でした。セザンヌの絵は、どこまでも純粋に、自然から感じたまま、自分が思ったままを、鮮やかな色づかいで自由に表現した個性的なもので

【ポール・セザンヌ】
一九世紀フランスの画家。「近代絵画の父」とも呼ばれる。

した。生馬は、息をのむほど心を打たれ、「やっと、探し求めていた新しい芸術に巡り会えた」と確信したのでした。

一九一〇年（明治四十三年）、日本に帰国した生馬は、留学中に描いた作品七十点を展示する※個展を開きます。これは、日本の画家が初めて行った個展であり、多くの人々に新鮮な感動を与えました。また、作家として日本にセザンヌを

ポール・セザンヌ「北フランスの風景」鹿児島市立美術館蔵

【考えてみよう】
あなたも、息をのむほど何かに感動したことはないだろうか。

【個展】一人の作者の作品を展示する展覧会。

紹介するために、雑誌「白樺」に「画家ポール・セザンヌ」を掲載し、ヨーロッパの新しい芸術の風を、情熱をもって伝えることもしました。

有島生馬「スザンナ」鹿児島市立美術館蔵

日本の洋画界に新しい風を吹きこむ一方で、生馬は、鹿児島出身の※東郷青児、海老原喜之助、吉井淳二、山口長男など、新しい感覚と才能を持った画家を数多く育てました。新しい世界や価値に驚くほど

【東郷青児】鹿児島市生まれの画家。独特の画風の女性像が有名。

【海老原喜之助】鹿児島市生まれの画家。絵に「エビハラブルー」といわれる鮮やかな青を多用した。

【吉井淳二】曽於市生まれの画家。生活感のにじむ情景を描くことで有名。

【山口長男】父親が薩摩川内市出身の画家。日本の抽象画の先駆者。

敏感な生馬の感性は、鹿児島県出身の数多くの若い芸術家を育てることにも生かされていったのです。

薩摩川内市の「川内まごころ文学館」には、この地で若き日の療養生活を送った生馬ら、有島芸術三兄弟の作品や直筆原稿が、数多く展示されています。常に新しい世界を求め続け、近代日本の芸術と文化をリードした彼らの思いは、今も鹿児島に残されているのです。

【川内まごころ文学館】